

「精神障害」の概念と「介入主義」

石原孝二 (Kohji Ishihara)

東京大学・大学院総合文化研究科

アメリカ精神医学会の DSM (『精神障害の診断・統計マニュアル』) における「精神障害」の定義では、1980 年の第 3 版以降、心理的・生物学的な「機能不全」が重要な役割を占めてきた。昨年出版された DSM-5 (第 5 版) でも、精神障害の根底には、「心理的・生物学的・発達の過程における機能不全」があるものとされている。この「機能不全」が一体いかなるものなのかは DSM では明示されていないが、機能不全がその根底にあるという精神障害観は精神医学関係者の間で漠然と共有されているものだろうし、J. Wakefield のような研究者は機能不全の基準を明確化することの必要性を強調してきた。

本発表ではしかし、機能不全を根底に据えるこうした精神障害観とは異なった捉え方を提示するものとして、J. Woodward の「介入主義」のアプローチを取り上げることにはしたい。「介入主義」とは一般に、操作やコントロールのために利用可能な関係を因果関係と見なすという考え方である。介入主義の考え方をとる利点としては、単なる相関関係と因果関係を区別できるという点や因果関係を時空的に連続したプロセスとみなさなくても良い点、また生物学的な要因以外の要因、心理的な要因や社会的要因も原因と見なすことができるという点などが挙げられる。本発表では精神障害に関する「生物・心理・社会モデル」やそれに対する N. Ghaemi の批判などをも踏まえながら、介入主義的なアプローチが精神障害概念を捉え直す上でどのような意義をもつのかを検討する。

*本研究は JSPS 科研費(24300293)による助成を受けている。